

遅い。

倉沢はいらしながら立ち上がった。

十分前に日付が変わった。佐竹から電話があったのは九時過ぎ。大雨とはいえ、夜の中央自動車道がそこまで混むとは思えない。事故か何かがあったのなら別だが。

事故——？

叫び出したくなるような不安に襲われ、倉沢は佐竹の携帯を再度鳴らした。呼び出し音が鳴り続けるだけで出る気配がまったくくない。リモコンを乱暴に引っ掴みテレビを付けた。目に飛び込んできたのは上空ヘリからの映像だった。タンクローリー横転炎上という白抜き文字が流れる。倉沢は身を乗り出した。

「お伝えしておりますように、昨夜九時四十分過ぎ、中央自動車道の上り車線でガソリン二十キロリットルを輸送していたタンクローリーが急カーブを曲がり切れずに横転し、左側側壁に衝突しました。その衝撃でガソリンが漏れ出し、引火したものとみられます。映像は現場上空からです。現在も消火活動が続いていますが、まったく鎮火していない状況です。この事故で中央自動車道大月IC付近で上下線とも通行止めとなっています。タンクローリーを運転していた方は未だ救出されていません。乗用車数台が火災に巻き込まれた様子です。繰り返しお伝えしています。」

倉沢は半狂乱になりながら携帯を握りしめた。十数回目の呼び出し音のあと、「浩二」と声がする。

「お前、いったいどういふつもりだよ！」

安堵から、倉沢はほとんど顔れるようにして床へ倒れ込んだ。

「何で出ないんだよ？ どれだけ心配したと思ってるんだ！」

「ごめん、現場検証に立ち会っていた」

倉沢は大きく息を吸い込み、吐き出した。

「すまない。心配しすぎておかしくなりそうだった」

「悪かった」

優しい声が聴こえた。

「これから都留方面へ迂回する。遅くなるけれど、必ず帰るから」

倉沢は目を閉じた。佐竹の声を聴いているだけで安堵が胸に拡がる。

「判った。気を付けて戻ってきてくれ」

「ん」